●◆しゃばのしがらみを超えて、仏の願いに生きよう◆●

仏の願い

西雲寺だより　立春号

★みなさまのおかげをもちまして★
本山両堂（阿弥陀堂・大師堂）の修復が完了しました。

落慶法要に参拝しませんか？

日にち　　４月２日（水）日帰り（早朝発です）
行き先　　佛光寺本山

※お申し込みは３月２３日(日)までといたしますが、
なるべく早めに連絡下さい。おかみそり(帰敬式)を
ご希望の方は２月末までにお願いいたします。

私（護城一哉）がお参りしますので、ご一緒にいかがですか？
少人数ならば自家用車に乗り合わせて行きますので、交通費は不要です。
人数が多いようなら車を手配いたしますので、実費を皆で割りましょう。

修復された大師堂（本山佛光寺）

無量寿を生きる

新しい年を迎え、また一つ年を重ねることになりました。めでたいというよりも、また一つ年をとってしまったという思いの方が強いのかもしれません。

私は年賀状に「謹賀新年」と書かずに「光寿無量」と書いています。これはもちろん、正信偈の冒頭の「帰命無量寿如来、南無不可思議光」からいただいたものであります。確かな実感があるわけではありませんが、今年も如来さまの無量寿のいのちに生かされて、限りあるいのちを尽くしていきたいという思いからです。

私たちは毎日「帰命無量寿如来・・・」とおつとめしていても、無量寿のいのちとはどういうものなのかはっきり自覚されません。お念仏申せば長生きさせてくださるのだと思っておられる方もおられるのではないでしょうか。

私たちが生きているいのちは、自我の執着によって自分の都合や思いによってとらえられたいのちであります。他人と比較し喜んだりひがんだりするいのちです。健康で役に立ついのちであれば好ましいけれども、年をとり、病気になり、役に立たなくなれば、価値のないいのちであります。しかし、人間は誰しも年をとり、病気になり、死んでいかなければなりません。自分の都合や思いでとらえたいのちを生きておったのでは、どれだけ長生きしても生きていてよかった、いつ死んでもよしといういのちの満足はないでしょう。

無量寿という如来さまのいのちは、役に立つとか立たないとか、健康で長生きしたから幸せで、病気がちで若くして死んだら不幸だという、そういう私たちの身勝手な都合や思いを超えた、無量の尊い価値をもったものなのです。私たちは誰しもそのような尊い無量のいのちを賜っているのです。如来さまはそのような真実のいのちに目覚めて、一瞬一瞬をよろこびをもって生きよと私たちに働きかけて下さっているのです。

正月に門前の掲示板に次のようなことばを書いておきました。

「両手の合わされたそこがいつでも浄土の真只中です。命ある間は浄土を生き、命終わればそこへ帰るのです。」

私たちはなかなか両手が合わされません。まして自分のいのちに両手が合わされることは私の方からは不可能なことです。如来さまの智慧によって永劫の自我の執着が破られた世界でありましょう。そこに、たとえ役に立たないいのちであろうとも、深い罪業をかかえたいのちであろうとも、無量の尊い意味を見いだし、両手が合わされるのであります。お浄土とはいのちの絶対満足の世界であり、お念仏申すところにお浄土の影がさしてくるのです。

（住職）

会計を担当して思うこと

吉川　芳弘
（福井市大島町）

お寺の世話方の一員になり、二十年過ぎました。二年前から会計のお世話をしています。御門徒の皆様方には、大変お世話になっています。

割方の集金に伺いますと、お寺は金ばかり集めてと、苦情を言われることがあります。しかし、割方のお金は本山の護持金や本堂庫裏等の修繕費、火災保険料などで、住職さんに入る金ではありません。私たちの本堂、庫裏であります。先祖が力を合わせて建立したものですが、本堂も「しだれ桜」と同じ、二百年以上たっていますので、いろいろ傷んでいます。修繕が必要な個所がたくさんあります。

昔は門徒が四百戸と言われました。昨年負担金を納めて下さったお宅は二百四十五戸です。世の流れでしょうが、若い人たちが都会で就職し、年寄りが亡くなると門徒が減っていきます。少しでも減少に歯止めをかけようと、若さんが若者達向けに「ホームページ」や「西雲寺だより」を発行しています。どうか門徒の皆様方も、息子さんや孫さんに、引き続き門徒になるように、また分家された方にも是非加入して頂きたいと思います。門徒が増えると、割方の金も少なくなります。

御門徒の皆様方と西雲寺のますますの発展を目指したいと思います。どうかよろしくお願い申し上げます。

西雲寺の年末年始

在所単位でのお参りの様子です。
ご家族でお参りされる方もおられます。

元旦の晨朝（じんちょう）

お鐘をついて
お御堂参拝

みんなでつきます、除夜の鐘

武周町

二ツ屋町

畠中町の方々による正信偈六首引

安田町の方々による正信偈六首引

別畑町

末町　本堂町

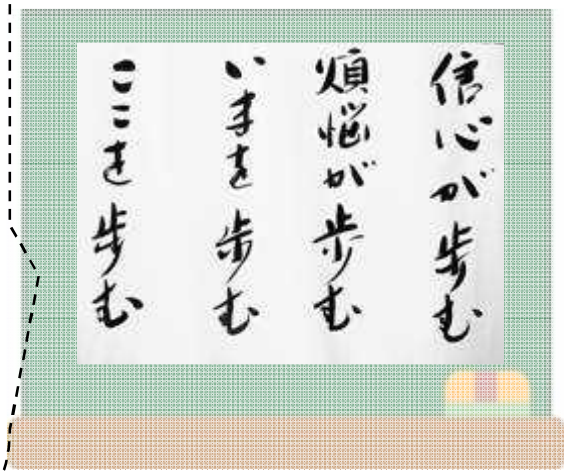
坪谷町

宿堂町

西別所町

尼ヶ谷町

山門掲示板



私たち凡夫が仏さまになるのには、五十三段の階段をのぼっていかなければなりません。それは死に変わり、生まれ変わり、計り知れない年月を要するのです。

その五十三段の中に大きな関門が待ちかまえています。それは、第四十七段目の七地沈空(しちじちんくう)の難で、自分はもう悟った、やるべきことはやったと腰をおろしてしまうことです。これを菩薩の死といいます。

私たちの人生においても、同じようなことがあるのではないでしょうか。世の中のことも仏法も分かったと、人生に卒業してしまうことです。

しかし、人生に卒業はありません。常に一年生に立ち帰って、聞法していくのみです。（住職）

親鸞作『正信念仏偈』より

観見諸仏浄土因

とけんしょぶつじょうどいん

この言葉から私は、浄土（迷いを超えること）の因は何？という問いかけをいただきました。

仮に、交通事故で身内が亡くなったとします。もし、加害者が「私の罪は死刑でも償えません。」と深く反省し、遺族が「悲しみは消えないけど、加害者は責められない。自分も縁に遇えば逆の立場だったかも知れないから。」と事実を受け容れたとすれば、どうでしょう。事実を共にし悲しみを共にする関係が結ばれていくのではないでしょうか。ところが、現実は往々にして逆ですね。加害者は事実を認めず、ご遺族は極刑を望んで争うという報道が重なると、何だか当たり前に思いがちですが、仏教は、それを穢土(えど)と教え、迷いであると教えます。

何も迷ってなんかいない、誠実さが問題なのであって、何も宗教に依らなくてもいいという考えも起こります。でも、本当にそうでしょうか。万が一、現場で誠実な心が起こって、謝罪し合い許し合えたとしましょう。でも、同じ日に同じ人間が、遺影を見れば湧き上がる憎しみを抑えられず、テレビを見ればこみあげる笑いを抑えられず、命を失ったというのに命を食さずには生きられないのではないでしょうか。果たして、自らの誠実心とは一体何なのか、浄土の因（迷いを超えるための根本）は一体何なのか、改めて問いかけられます。（編者）

読み方―諸仏の浄土の因を観見して。
※見―見ること。
※観―はっきり見分けること。

年間行事予定
（平成二十年度）

6月中旬
本山差し向け布教
布教使　日野宣也師（新潟）
（14日西雲寺　16日安田　17日本堂）
※西雲寺の日にちが変わりました

7月6日
門徒研修会（本山参拝予定）

7月10、11日　**永代経**

8月10日（第二日曜）　盆会

10月17～19日　**報恩講**

11月28～30日
御正忌報恩講

12月31日～1月3日
除夜の鐘、お年頭

3月20日
世話方集会

図書紹介

今回は、読み物ではなく、聖典です。お釈迦さまが説かれたお経や親鸞聖人のナマの言葉に、直接触れることができます。

この『聖典』は僧侶だけの物ではありません。教えは決して人ごとはないのです。教えの言葉は、人生訓とか人生問題の答えとかではなく、私の生き方に真剣な問いを投げかけてくれるものだと思います。蓮如上人は「聖教はよみやぶれ」と言われました。周りで誰も持っていないと恥ずかしいものですが、先人が大事にされた歴史を励みにしましょう。キリスト教の方も『聖書』を持ち歩くではないですか。

赤い表紙（お東）の「小」は、辞書並みで持ち運び易いです。青い表紙（お西）の方は、大きめですが語句解説や索引が付いています。県内の書店、もしくは東西の別院で入手できますし、インターネットでは東西の本山のサイトや法蔵館のサイトなどで注文できます。お困りの場合は西雲寺までどうぞ。

『浄土真宗聖典』
註釈版第二版
本願寺出版社
５４６０円

『真宗聖典』
東本願寺出版部
大３５００円
小３０００円

発　行
真宗仏光寺派 専念山 西雲寺（さいうんじ）
住職　護城一寿
筆頭総代　鈴木春夫
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ　http://arukou.net/

みなさんの声 大募集！

「西雲寺だより」は、お同行の皆さんと作る新聞です。みなさんの声をお聞きしながら、より身近な新聞にしていきたいと思いますので、原稿や文芸作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。

なお、次号の原稿は３月 20 日までにお願いいたします。